

第七章 戦争と民衆——戦後編——

第一節 戦後地域文化運動と福生の青年

戦後地域文化運動 「戦後地域文化運動」という言葉は、学問的に定着しているわけではないが、三多摩におけると三多摩の「魂」 昭和二〇年（一九四五）八月一日以降の、さまざまな民衆の動きを見ると、地域文化創造へ

のほとばしる情熱と地域変革への燃えるようなエネルギーを感得することができる。「新生」「再生」「新しい文化創造」「改革」という言葉が、新鮮な響きをもって使われ、若者はその最前線にたとう、という訴えや叫びが、あちこちであがったのである。

それはまた、一八八〇年代、つまり明治一〇年代に三多摩各地に燃えあがった「自由民権運動」や、それから三〇年後の一九一〇年代から二〇年代にかけて、大正デモクラシーの強い影響を受けた青年や教師たちによって盛りあがった「地域文芸運動」とも並ぶほどの広範な運動となって展開した。自由民権運動を第一期とすれば、「地域文芸運動」は第二期といえるが、その大正期の運動から三〇年後の一九四〇年代後半の「戦後地域文化運動」は、三多摩の文化運動の第三期ともいえるもので、三多摩にとっては約三〇年を周期として、草の根の文化運動が湧水の如く湧き出してきたともいえよう。それは三多摩の民衆に、自由民権運動以来、脈々と流れている「魂」のようなものともい

える。あるいは「文化の伝統」ともいえるかもしれない。こうした歴史の流れの中で、戦後のさまざまな動きを見える必要がある。(すでにこのテーマについては、新井勝紘が「焦土の中の地域文化運動その1」6『隣人』の中で詳細に分析紹介しているので、あわせて参考にしてほしい)。

いち早く、目覚めて行動を開始したところが運動の発火点ではあるが、その火は単一ではなく、同時多発といえるように南、北、西と三多摩各地にマグマが吹きだしていた。それらの動きが、さらに触れあい、交流することによってより大きな炎となり、お互いに刺激しあって新しい文化の創造へと向かっていったといえる。

まず、南多摩郡鶴川村(町田市)の『部落文庫』の動きが口火を切ったところで、終戦二か月後の昭和二〇年一〇月からはあるが図書館運動が先陣を切っていることが、三多摩地域文化運動を象徴しているともいえる。鶴川村の動きはすぐさま恩方村(八王子市)に飛び火し、松井翠次郎の「多摩青年文化協会」(昭和二年三月発足)につながっていく。橋本義夫の揺籃社の動きへと派生していく。

一方、同じ昭和二〇年秋頃、北多摩では国分寺町本多(国分寺市)の青年たちによって「黎明会」が発足し、会誌『黎明』を発行して、言論、創作活動をはじめていた。翌二一年一月には「谷保村青年会」(国立市)も発足し、青年たちを核にして新しい動きがでていた。

福生青年団再結成 ところで、西多摩の動きはどうであろうか。もっとも早く始動するのが福生・熊川の青年たちと『理想の下に』である。青梅・五日市・瑞穂・奥多摩なども青年団や農民組合の動きがみられるが、それは終

戦から半年後(昭和二一年一月から二月)である。福生と熊川の青年たちはそれに先立って動きだしている。

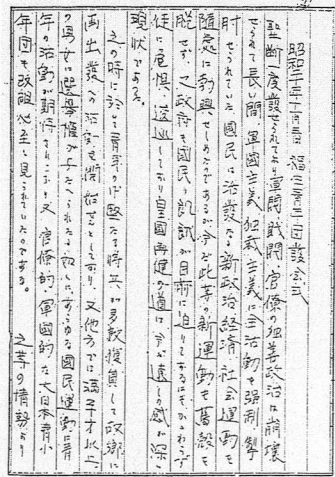


図 V-99 福生青年団発会式宣言
(昭和20年11月3日 橋本孝蔵家文書)

織を、もとの原点にもどすような新生をはかったのである。

発会式での宣言は次のとおりである。

聖断一度発せられてより、軍閥、財閥、官僚の独善政治は崩壊せられて、長い間軍国主義、独裁主義に全活動
を強制、掣肘^{せいじう}せられていた国民は、活発なる新政治、経済、社会運動を随处に勃興^{はつこう}せしめたのであるが、今だ此
等の新運動も旧殻を脱せず、又政府も国民の飢餓が目前に迫りておるにもかゝらず、徒に危惧^{いけん}、逡巡^{しゆんじゆん}しており、
皇国再建の道は今だ遠しの感が深い現状であつた。

之の時に於いて、青年の中堅たる将兵が多数復員して、故郷に再出発への活動を開始せんとしており、又他方
では満二十歳以上の男女に選挙権が与たへられたる如くに、あらゆる国民運動に青年の活動が期待されており、
又、官僚的、軍国的な大日本青少年団も改組必至と見られていたのである。之等の情勢^{じやうせい}より新青年団発足の気運

終戦から間もなく青年団再結成に向けての動きが始まり、
それがわずか八〇日後の二〇年一月三日、橋本孝蔵、山崎
良之助、井上重雄らによって「福生青年団」を再建発足させ
ている。団長は橋本、副団長が山崎、男子部長が井上、評議
員に清水茂、井上利雄、笹本保治、桑林重雄などの陣容でス
タートした。さらに第二支部として、井梅伊助(支部長)、
細谷利男(副支部長)を中心としたグループを発足させ、昭
和一六年に戦争協力組織の「青少年団」に改組させられた組

は、心ある若人の胸中に芽生えたのである。

之の時に於いて、前青年団長橋本孝蔵氏は社会運動の中堅たるべき強力なる青年団の発足を図り、一日永田俱樂部に於いて、復員諸氏と談合して、新青年団の構想を練り、諸方に奔走して之が準備を完了し、遂に十一月三日、福生第一国民学校の講堂に於いて、我が福生青年団は呱呱^{こご}の声をあげたのである。

「新しい酒は新しい甕に」。新しい思想を有する我が郷土の若人は、他の掣肘を受けない青年のみの青年団たる新しき組織の下に、再建日本の大道に踏出したのである。

長い間軍国主義や独裁主義に強制、掣肘させられていた国民が「新政治、経済、社会運動」をおこしたが、なかなか「旧殻を脱」することができないし、国民の飢餓を前にして政府も「危惧、逡巡」しているだけで、打開策をたてられないでいる。こういうときこそ、社会運動の中堅にいる青年たちが「再建日本の大道に踏出」さなければならぬと呼びかけて発足したのである。

団長になった橋本孝蔵によれば（「福生青年団あれこれ」、「月刊ふっさっ子」三七八）、「お互に、自由主義・民主主義ということとは、いったいどういうことなのだろうか」と話し合いながら、自分たちの集りを作ろうということになり、昭和二十年十一月に戦後の新しい青年団が結成されました。ですから、あくまで自主的な組織で、町から補助金など貰わずに、あくまで青年の力でやって行こうという意気込みは誠にさかんなものでした」といつている。紐付きの金などに頼らずに、「あくまでも自主的な組織」でやっていこうという自負心と、団に対する並々ならぬ決意と情熱を感じることができた。

そして橋本は青年が軍歌でなく、思いきり唱える歌がほしいと、一つの歌をつくった。橋本自身は「青年の悩みを

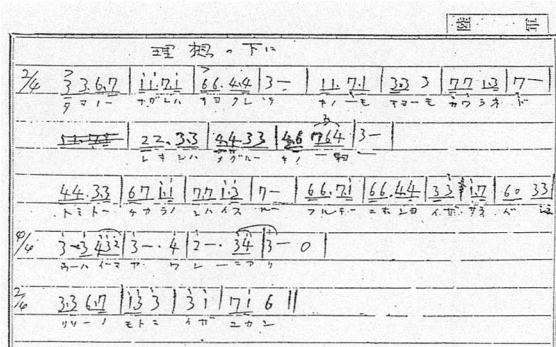


図 V-100 楽譜「理想の下に」(橋本家文書)

そのままぶつつけたような文句」(前同)といっているが、「理想の下に」というタイトルが示すように、それまでの暗くて重い重石をはねのけるような清新的言葉にあふれていた。節も自己流でつくったが、のちにNHKの音楽部にいた橋本の友人に本譜に直してもらったといっている。

一 多摩の流れは清くして 昨日も今日も変らねど

歴史はめぐる昨日今日 富と力の支配する

古き日本よいざさらば

自由は今や吾にあり 理想の下にいざゆかん

二 自由の世界来れども 人の心はあれすさび

名利私慾に眼もくらむ ああ混沌の世に処して

吾等若者いかにせん

自由は今や吾にあり 理想の下にいざゆかん

(三番以下もリフレイン)

三 芙蓉の雪は白くして げに美しきものなれば

吾等の心また清し 富士の高嶺をふり仰ぎ

誠の道を進まばや

四 御嶽嵐の寒くとも 多摩の山々晴れわたり

鉄持つ腕はたかなりぬ 聞けよ響きを建設の

土の叫びは切なるぞ

五 ああ吾理想高くして よしその道は果て遠く

波乱曲折あるとても 力のかぎり根かぎり

共に進まん いざやいざ

六 その名もゆかし福生まち 集う健児は八百名

吾等叫びは小さけど やがては響く大洋の

寄せては返す波のごと

(前同「福生青年団あれこれ」)

一番の歌詞にある「富と力の支配する古き日本よいざさらば」にみられるように、戦争にあけられてきた軍国主義を断ち切り、「自由」を得た青年は、いまこそ理想の社会を築かなければならないと訴えている。その道は「遠く」、「波乱曲折」はあるかもしれないが、八〇〇名もの青年が立ちあがれば理想の社会をつくりあげることができるともいう。「主として歌詞も一番と六番だけが唱われるようになった」(前同)といわれているが、一番に込められた思いは強烈なものがあるからこそ、歌われたのであろう。橋本は「団歌」としてつくったわけではないといっているが、いつしか『青年団歌』のようにうたわれるようになっていった。

青年団ニュース 青年団結成の二か月後には「福生青年団ニュース」第一号(昭和二十一年一月一〇日)を発行して活動の記録
いる。その巻頭で橋本孝蔵は、「青年の力」と題して次のような『檄』をとばしている。

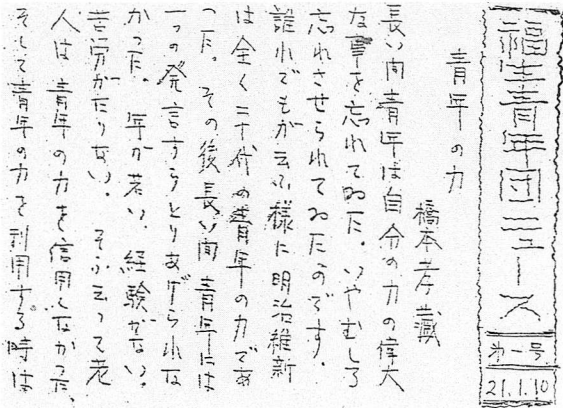


図 V-101 「福生青年団ニュース」第1号
(昭和21年1月10日 橋本家文書)

を待つばかりでは真のよりよき社会は生れない。

今若し青年が立ちあがらないとしたら、それは卑怯者である。ひきょうもの働くべき場所も充分あり、発言も自由になった今、今こそ青年は自らもはげまし、人もはげまし、共に立ちあがる時です。大いにがんばりませう。

長い間、押さえつけられてきた「青年の力」を、いまこそ古い軛くびきから解放し、責任ある「行動と発言」に向かわせる努力をすべきだと訴えた。それには「過去の力」とたたかい、「マッカーサー指令部の指示」だけを待つのではなく、「自らもはげまし、人もはげまし、共に立ちあがる」ことがもっとも必要なことだと、戦争後遺症のように一日中ぼんやりしているような若い青年の心を鼓舞する言辞を、次々と発していた。

また、同ニュースは、「女子の方々へ」として、参政権を得た女性に対しても「正しい政治は正しい貴女方の投票によって生れます」といって、紙芝居や幻灯写真で参政権についての学習会をすることを知らせている。

このように団長橋本の言葉は、新生青年団の行動の指針となり、次の実践活動に結びつく大きな起爆剤となっていたのである。

それでは、青年団はどのような活動を展開したのだろうか。

まず、大正一四年に青年だけの力で、二〇〇円も借金をしながら建設した「福生青年団倶楽部」から、戦争が激化した段階で（昭和二〇年四月）一階部分を使用した東京消防署福生出張所に、立退いてもらう運動をおこすところからはじまった。表V-24を見てもわかるように、地域に密着した問題に積極的に取り組むと同時に、「過去の力」と闘うための政治意識の覚醒と、地域変革へ結びつく行動も具体化された。「町のあらゆる層をあつめて」の「全町民座談会」などは、詳細は不明であるが、直接民主制の動きともいえよう。また、読書会、英語講習会、華道の講

表 V-24 青年団の活動記録（昭和20～21年）

	活 動 内 容 一 覧
1	倶楽部を占領した東京消防署福生出張所立退き運動
2	「部落の人を慰める娯楽会」を子どもたちと開催
3	戦災者のためのバザー（昭和20年11月頃）
4	「青年団ニュース」の発行（同21年1月10日）
5	数百枚のふとんを戦災者に販売
6	全町民座談会
7	弁論会（同21年3月10日）
8	英語講習会（於長沢クラブ、水・土の週2回）
9	婦人参政権説明会（於国民学校）
10	桑の根から油をとる講習会
11	女子部、立川の病院に傷病兵の慰安訪問（熊川と合同、3月28日）
12	読書会発足
13	お花の講習会（4月）
14	素人演芸会（9月）
15	大久野青年団（日の出町）との交流（10月）
16	青年団農場
17	わらざうりの講習会
18	墓地掃除・川さらい
19	サツマイモ苗床の夜警
20	西多摩郡連合青年団結成準備
21	月報『多摩の礎』発行（創刊は3月か）

『ふっさっ子2』・「青年団ニュース」などから作成

習会などは、文化創造への第一歩ともいえる。

『多摩の礎』 福生青年団の月報『多
と戦争の反省 摩の礎』は、昭和二一

年三月に創刊号が発行されたことが推定されるが（現存する第一巻第二号が同年四月発行）、その後、八号（同年一〇月）まで発行されたことが確認されている。ただし、一、四、五号は未確認である。印刷はガリ版刷りで、何人かの団員が手分けしてガリをきっている。二〇頁のときもあるが、四頁くらいの短かいときもある。内容は団員の意見、主張、エッセー、小説、詩、俳句、短歌、記録等々で、豊富なものになっている。

掲載された団員の主張や意見から、青年たちの上に直前まで心身双方に覆いか



図 V-102 『多摩の礎』5月号
(橋本文家文書)

ぶさっていた『戦争』という巨大な怪物の翼から、青年たちが何とか飛び出し、新しい国家づくりの一員として役割を果たすようになることを願って、それぞれが葛藤している様子がうかがわれるのである。

次の第四支部の団員の意見(『日本』『多摩の礎』第一ノ二)は、国民自らの戦争責任を、鋭く問うている。

三千年不敗の伝統に生きてきて、我等は子孫の為、悔を千載に残すまじと誓ひ合せて敢て苦難に堪へ、欠乏を忍んできた。軍閥の誤れる功名心、野心の為に、一朝にして拭ふ可からざる汚点を歴史に印してしまった。否、汚点といふには余りに大き過ぎる。建国以来の歴史を一朝にして全く此処に滅し去った。だが、必ずしもその責は、軍閥のみにあつたのではない。財閥、又軍財閥に阿諛迎合した重臣や官吏のみにあつたのではない。之ら誤れる者共を阻止し得なかつた国民、之らを批判し得なかつた我ら国民にも責任のあつたことを、心から反省しなければならぬ。

願れば、大東亜緒戦及び支那事変の上海、南京陥落の時、我々は国をあげて熱狂し戦勝を祝したではないか。

それが作戦不利となり、終戦となるや、国民には責任はないといふ。しかし、責任の一端を担ふべきである。国民は皆、戦争協力者であつた。(略)

我々は敗戦といふきびしい現実を初めて体験した。支那事変當時は支那から帰ってくる人々の土産話を笑ってきいてゐたが、それが現実の日本の姿となつてしまったのである。然し、敗戦といふものは、こんなに生やさしいものであらうか？ 我が日本には

試練の嵐が吹いてゐるのだ。之から益々酷しさを増して来るのだ。

古き事、過ぎ去ったことを反省することは必要であるが、それにのみとらはれることなく、新しい自由の下に、民主の日本を建設しやうではないか。

国民にも軍部の暴走を阻止できなかったことの厳しい反省が必要であることを説きながら、その反省にのみとらわれずに、この自由社会のもとで、民主的な国家を一日も早く建設しようと呼びかけている。戦争責任を他人に、あるいは軍閥や官吏などに一方的に押しつけるのではなく、自分自身への自己批判を要請している。青年たちにはそれだけ冷静に、客観的に「戦争」というものをかえりみる事ができる余裕が、昭和二一年四月の段階で生まれていたというのである。

団員諸君読んで下さい

四支部（不死未来永劫居士）

皆さん戦争は終わりました。そして静かな平和な春が、再び廻って来ようとして居ります。でも皆さん、私達は只ぼんやりと戦争前と変らない様な生活を続けて居て良いのでせうか。あの頃の日本には悪い根が一杯にはびこって、私達を苦しみ様として居りました。（略）

私達は此の戦争を何んと教えられたのでせう。「聖戦」と教えられました。「世界平和の戦ひ」と教えられました。若い人達は時の指導者達に、この様に教えられました。そればかりではありません。そう信じさせられたのでした。（略）

其の時、すべての立場にある指導者達は、何んと言ったでせう。皆さんも充分に此の時の記憶はあると思ひます。其の時偉さうな事を言つて居た人達が、果して何をして居たでせう。私は敢て言ひます。私は其の人の人格を信用し、尊敬する事さえ出来ません。

「聖戦」と教えられ、「世界平和の戦い」だからといって若者を戦争に駆りたてていった指導者たちの欺瞞さに、純粹な青年の心は激しい憎惡さえ覚えていたのである。人格を疑わざるを得ないという結論に達している。

戦後の地域社会の中で、復員してきた若者をもまじえて、老壮青年は、戦争へのかかわり方の違いをひきずりながら、内面の相克を繰り返していたのである。偉そうな口をきいていたのは行政のトップでもあるし、在郷軍人会や愛国婦人会の役員でもあり、教師でもあり、軍の幹部でもあったわけだが、その身近に居るかつての指導者たちと、「兵隊になつては南に北に、遠く故国を離れて、或は国土上空に、喜んで挺身隊に、特攻隊に加はり死んで行つた人達」との間の深い溝は、そう容易に埋めることはできない。

「ハイ」と、一にも二にも命令の、軍ばつの世今や去りなん」（『軍国主義追放を喜びて』『多摩の礎』一ノ二）というように、あるいは「歩んで来た道というよりは、むしろ歩まされて来た道」という過去の分析は、正鶴せいこくを射つた意見といえるが、その過去の道から脱出し、「希望のある道、花さく道」（内田高正「終戦一周年を迎えて」『多摩の礎』終戦一周年特輯号）を歩くのはなかなかむずかしい。「飢餓、反動の嵐、封建の夢さめやらぬ古き官僚群」（前同）との闘いが横たわっているのである。「心新に光を求めて、若き力をもて進まん」「早く早くさめよ日本」「わたしは叫ぶ、人間になれ!!」「若い力で日本を再建しよう」と次々と速射砲のように発する言葉は、やはり若い青年層の特権であらう。

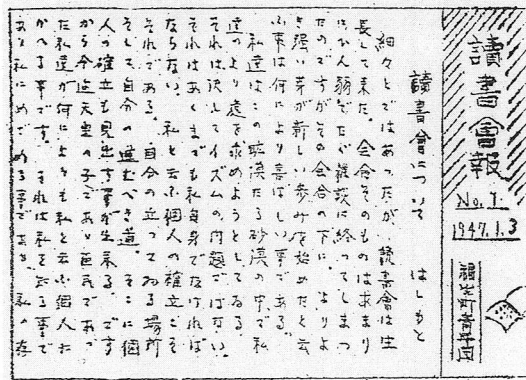


図 V-103 「讀書會報」 No. 1 (昭和 22 年 1 月 3 日
橋本家文書)

『多摩の礎』にあらわれた福生青年団の健全な精神と、意欲に燃える行動力は歴史的にも高い評価を与えてもいいのではないか。

青年団の読書会 福生青年団には昭和二一年四月に「読書会」が発足した。

橋本孝蔵が、東田平治の読書指導方針に依拠して立案したのが、そもそものはじまりである。とりわけ女子団員に熱心なものが多かった。会則は、一毎日必読すること 二 読書日記(図書名、筆者名、感想、読了頁数)を記載すること 三 又貸しはしないこと という簡単なもので、「研究の自由をさまたげることはない」という但し書がついている。要するに本を読むことを日課にし、読んだ本は必ず記録しておけということである。橋本は自分が中心ではじめて「読書会」について、次のように記している(「読書会について」『読書会報』一、同二年一月三日)。

(略) 私達はこの眩漠たる砂漠の中で、私達のより処を求めようとしてゐる。それは決してイズムの問題ではない。それはあくまでも私自身でなければならぬ。私と云ふ個人の確立こそ、それである。自分の立つてゐる場所、そして自分の進むべき道、そこに個人の確立も見出す事が出来る。ですから今迄天皇の子であり、臣民であつた私達が、何によりも私と云ふ個人にかへる事です。それは私を知る事であり、私にめざめる事であり、私の存在してゐる社会の環境を知る事です。読書会はそうした意味で、大きな役割を果して来たと思ひます。

知識の爲め……ましてインテリと云はれる為の読書ではない。併し知識を得る事は私と云ふ個性にめざめる一つの道であり、過程である。ですから一農夫がゲーテを語り、トルストイを読む事は不自然ではないのです。かつて読書を行動と結びつけた時代もあった。特に農村の篤農青年をつくる場合さうであった。併しその様な道からだけでは敗戦日本を救ふ事は出来ない。日本の直面している問題は其様な甘い処にはなく、遙かに深い処に存在してゐる。私達は先づ学ばねばならない。それが第一の問題です。トルストイを読み、ギリシャ文化を語り、農村問題を論じ……、そうした処に始めて個が生れて来るのです。個の誕生はやがて新しき人間の発生です。そこに日本民主化の道も生れるでせう。

読書とは畢竟、私自身の探求なのです。

読書の本質を論じた文であるが、そこには長い間、「個」や「私」が抑圧されていた時代からの、解放への熱い思いが込められている。「個の確立」こそ、近代社会における人間のもっとも根元的な条件であることを前提に、読書というものを考えているのである。けっして「天皇の子」や「臣民」ではない。そのためにこそ、「私にめざめる」必要があるという。そのコースを歩むために読書をしていけば「個の誕生」から「新しい人間の発生」へ、さらに「日本民主化」へとつながるという。

橋本が考えた青年団の読書会は、芽は小さいけれど、その結実の先は、壮大な道に連結している。この文そのものは、会発足から一〇か月ほどあとに記されたものだが、読書会の歩みについては、「細々とはあったが、読書会は成長して来た。会合そのものはあまりにひん弱で、ただ雑談に終ってしまったのですが、その会合の下に、よりよき強い芽が新しい歩みを始めたと言う事は、何により喜ばしい事である」と述懐している（橋本「読書会について」）。

すでに「強い芽」が吹きだしているという。

毎月一回の例会は、およそ次のような活動である。図書交換がおこなわれ、義務である一か月のそれぞれの読書日記が提出され、そのあとお互いの感想を述べあう。感想発表では、関心を強くもっている少数の人たちだけの激論になりがちで、その本を読まなかった者や、他の分野に関心を持っていて残されることもしばしばであった。そのために「社説」のようなものを決めて、読書会的に討論することが検討されたりしているが、いずれにしても会員は「例会毎に一人二人と飛び込んで来た人達」も加わって、昭和二十一年一月の時点で二〇人を数えている（『ふるさと』）。また過去四か月間の七名の会員の読書日記のデータは、頁数で二万五六一七頁、冊数で一四一冊、つまり一人一日平均三〇・五頁読んだことになる。全会員のデータが揃っていないので、平均といっても多少の偏りはあるが、およその数だとしても、日課として三〇頁以上の本をコンスタントに読みつづけることの意義とその効用は大きい。目的にかかげた自己覚醒かくせいに当然つながってくると思われる。

こうした着実な積み重ねが、次々と新しい芽を生みだしていく土壌づくりとなったといっても、過言ではないだろう。

第二節 戦後地域文化運動と熊川の青年

熊川青年団と 次に熊川村の青年たちの動きを見てみよう。福生の橋本と同様の役割を果たしたのが、昭和一八年『ふるさと』（一四三）から終戦をはさんで二十二年九月まで、福生第二国民学校（福生二小）に教頭として在職し

ればならぬのである。そして、そこに明瞭となったものが、長い長い困難であり、不可能に近く思はれたとしても、生に愛着を持つかぎり、信念によって立ってゐる限り、開拓しなければならぬ道である。

自分たち自らがこの「新しい局面」を「戦い取ったものでない」ことに、「間隙」や「不安」を感じてはいるが、「青年を学び、青年団を学び、郷土を学び、祖国を学」ぶことによって、郷土や祖国の再建を果そうと強い調子で叫んでいるのである。青年の力の結集がなければ成し遂げられないとの思いが文面に表われている。

当面の目標を次の五点にしばって、その実践を呼びかけている。○青年団自身の自己修養 ○村民の声を広聴すること ③明朗性 ④社会不安を取り除くための取り締り ⑤学習の場としての青年学校運営である。そのために『ふるさと』を、役に立てようというネライがあった。次の文は並木が古里中学校に移って以後、編集をまかされた浜中伴藏（のちの岩下）の文である。

青年層の叫びをのせ、未知の者との意見の交換を行って互に知りあい、大は世界、日本についての認識、小は我が町村、我が家等に対する認識を深め、青年として、農民として、勤労者として如何にあるべきか、とゆう問題を検討し合ってきたのである。（略）「ふるさと」に於いては、種々の問題が他人のうけうりでなく、自分自身の問題として、自分の立場、青年団の立場、郷土の立場を通して実際に経験し、又しつつかある問題として、しかも自分自身の力一杯の思考を通じて論じられてきた（『ふるさと・二四』）。

つまり、青年層は背伸びをせずに、等身大の思考で地域や家、あるいは国家や世界を論じるべきという考え方である。『ふるさと』はそれを実践してきたという自負がある。

『ふるさと』は二五号（昭和二年一月二〇日）まで確認されているが、発行二周年にあたる二四号（同年一一

月三日)に、一号から二三号までの主宰者の並木を除く執筆陣の執筆回数が掲載されているが、教員をはじめ、農業、勤労者、学生など延べ二六名に及んでいる。地域別でも福生と熊川が各八名、あとは青梅町、五日市町、瑞穂町、増戸村(五日市町)、東秋留村(秋川市)、大久野村(日の出町)、西多摩村(羽村市)と都内が各一名(他に不明が二名)で、西多摩各地に広範な執筆者をかかえていた。また読者の方も、最初は三、四〇人だったのが次第に増加し、終わり頃には二、三〇〇人にもなっていた。

つまり、『ふるさと』は並木と浜中を核に、熊川と福生の在住者が支え、並木とつながっている西多摩各地の教員などが広くバックアップしながら成り立っていたといえることができる。これらの参加者たちがまた、その後の西多摩各地での教育と地域文化運動の中軸となっていくのである。

参加者二六名は次のとおりである。()内の数字は執筆回数。

浜中伴蔵(一三)、下田寿二(六)、細谷利雄(六)、渋谷節子(五)、児島春之助(四)、川窪克己(三)、田島定雄(二)、内田高正(二)、倉島裕(二)、綿田三郎(二)、柿沼正悦(二)、山崎繁男^(茂か)(二)、石川利雄(二)、あとは一回の木下虎雄、田村孝一、関口俊茂、来住野嘉平、石川照子、篠崎久治、唐沢健一、小林梅子、浦野新一、伊藤勝太郎、飯田栄彦、中野宗一、井梅伊助。

『ふっさ』と並木の転任にともなって『ふるさと』を受け継いだのは浜中伴蔵であったが、浜中もまた福生地域生活文化創造で『ふっさ』という名の会誌を出していた。現物は未確認であるが、「六号をもって『ふっさ』を中止し、『ふるさと』に合流」(『ふるさと・七』)とあるので、少くとも『ふっさ』という個人誌は六号までは発行がつけられていた。浜中によれば「九月から学校の勤めがはじまった。占領政策で日本の今までのものはすべてひっ

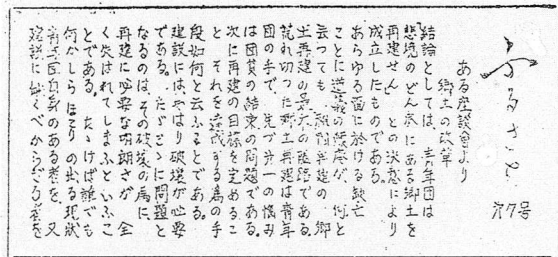


図 V-105 『ふるさと』第7号

くりかえされていく中で、呆然としていて、新しいものになじもうとするのが精一杯」(岩下伴蔵「校外生活指導」『一小記念誌』)と、戦後改革にとまどいながら、生来の行動力と情熱とがうずき出し、まず教員仲間と幻灯会をはじめている。「宿直室の布団の中に四人五人でくるまりながら、幻灯会のこと、児童達のこと、教育のこと、生活のこと、恋愛のことなど」を語りあっていたという(「校外生活指導」)。それは浜中にとっても「最も幸福な時代の一つ」だったともいう。それだけ新しい時代に対応しようという熱い思いがほとばしりでていたのであろう。

浜中の「郷土文化論」は、「人々の生産、消費生活の中から生れ、改善して行くもの」という、しっかりと地についたものであった。思いあがり、はねあがりを嫌い、ひとつひとつ、一段一段積み上げていくことの重要性を説いていた。『ふっさ』の発行も、『ふるさと』の並木からのバトンタッチも、浜中にとってはこの延長線上にあるといえよう。

今まで長つづきしない郷土文化は、郷土の生活に根をおろさず(極端にいうなら、生産に根をおろさず)、徒に文学・芸術を、しかも一足とびにその最高のもののみを追い、鼻を高くしていたからではあるまいか。郷土文化が郷土の人々の生産、消費生活の中から生れ、これを改善して行くものであるとき、はじめて永続性、発展性のある文化となり、郷土人一人一人の文化となるのである。女性の向上も、現在の家庭生活の改善(いな改革)なくしては、真の向上は望めまい。

地域生活に腰を据えた運動は、並木の『ふるさと』と浜中の『ふっさ』との合体で、新しい本流はさらに力強くなっていったといえる。この『ふるさと』の執筆者の輪がまた、それぞれ独自の活動の場へと拡がっていったのである。結ばれた輪がほどけると同時に、次々と新しい結び目が生まれていったといえる。

熊川青年団 熊川の森田正は、戦後の熊川青年団について次のように語っている。「俺が復員してきてから、今のと地域活動 若者の動きをとても気にしていた。新聞に出る『若い人の問題』なんていう記事には、特別に注意し

て見ていました。それから一人で考えたってしょうがないと、並木嶋雄先生のところへ遊びにいった、先生からいろいろ助言を得た。そして熊川の若いもんによびかけて、青年団結成となったんですよ。その時、熊川のクラブへ五十名の男女が集まって準備ができた。皆の話し合いで私が団長、副団長に乙津義男ということになった」(「座談会・福生町青年団」『ふっさ子・二』)。熊川青年団の戦後の出発は、復員兵と並木嶋雄の出合いがきっかけであった。「若者の動き」を気にしていたというように、今後の社会のあり方と混乱期の中の青年の生き方を重ねあわせて考えてみようということが、森田や乙津などに共通していた。一人ではその先の方向を見出すことができない。そのもどかしさや、不安が、『集まり』になって青年団へとつながっていく。そうした個々の青年たちの接合剤のような役割を、並木は果たしたといえる。村の中で学校の教師というものの存在感はかなり重いものがあった。

「それから、たびたび青年で集まって議論しました。その真剣ぶりに感心したといって、石川弥八郎氏が我々の中に入ってきてくれました」(前同)という。村の中核的な存在の石川(昭和二〇年一月一七日より敗戦をはさんで二一年一月二五日まで福生町町長)が参加してきたことの意味は大きい。石川自身ものちに「私の生活にバックボーンがある」とすれば、それはみんな青年団のおかげです」(前同)といっている。

昭和二年四月一日、マッカーサー司令部民間教育情報部のピッカリング大尉が、「日本の青年団は何を考え、何を為しているか」を知るために、全国数か所の青年団を視察したが、そのうちの一つに熊川青年団が選ばれた。それは石川が運動して招いたといえる。日本の青年団を「ヒットラーユーゲントのように考えていた」米軍の誤解をとくために地域の青年の実態をみてもらうためであった（前同）。当日の同行者は、青年懇話会の熊谷辰治郎（元大本連合青年団総務部長）、ラジオ取材のための中央放送局教育部長の水川、同局「学生の時間係」の五味、それに町長の石川真作である。青年団は「飾らない、ありのままを見ていただく」ことにして、いつもどおりの活動をおこなった。ピンポン、アコーディオン、レコード鑑賞、トランプ、将棋などの遊びや語らいのあと、討論会を開いている。「雑誌『青年』の輪読から討論に入り、大体次の点を議題として討論は展開された。①敗戦の原因と戦争なき世界をつくるには如何にすべきか ②新日本建設の目標 ③食糧問題——イ肥料の問題 ロ過剰人口の解決 ハ農村青年の責任としての増産運動について」(『ふるさと』)というテーマで、約三〇分間つづけられた。日本の敗戦の原因と今後の世界平和・新日本建設の実現のために、今青年は何をなすべきかという大テーマと同時に、農村がかかえている現実的な問題についても真剣な議論がたたかわされた。「農村の青年の悩み」を大いに訴えたともいう。

実際、視察を終えたピッカリングは熊川の青年に次のように語った。「今日、熊川の青年達が行ったような重要な社会問題を討論することも、アメリカの青年達に盛に行われている。現在ほど重要な時期はない。世界のなやんでいる問題を大いに討議して、その解決法を見出していただきたい。大切な問題を真剣に考え行動し、それを解決して行くことは、是否とも必要なことである。それを果す間にも楽しみつづけることである。楽しみのうちに明日の生活の力を養うのである。真剣の連続は反って逆な効果となって現われる。この意味から今日皆さんがやられたようなこと

第2節 戦後地域文化運動と熊川の青年

表 V-25 熊川青年団の地域活動（昭和21～22年）

	地 域 活 動 内 容
1	熊川第二小学校の卒業生と幹部の懇談会（昭和21年3月12日）
2	宿泊錬成会（同年3月15～19日）
3	発明工夫展覧会（同年4月）
4	素人演芸会（同年4月20日）
5	『家の光』読書会
6	町長選の立合演説会主催
7	空襲をうけた人のための衣類バザー
8	被災者の家の修理
9	“戦災者に凍てつく冬がやってくる。救援の手を”というポスター作成
10	「住民の和」を目指して、みこしをかついで熊川地区一周
11	婦人参政権の問題を取り上げた巡回映画会開催
12	農産物品評会（同年11月23～24日）
13	熊川保育園設置運動展開
14	宮城の清掃奉仕（昭和22年5月12～14日）
15	決壊した熊川の堤防工事手伝い（同年9月）
16	ガリ版の会報発行（東山秀夫、児島春之助らが中心）

新井勝紘「草の根でつながる西多摩の青年——焦土の中の地域文化運動その4」（『隣人・8』）で作成した項目に、『ふるさと11・12』掲載の「西多摩郡青年座談会」（1）（2）の熊川青年団員の発言から補充した

に賛成出来る」（『ふるさと』）と。娯楽と真剣な討論の共存が大事だと説いているが、熊川青年団はまさにそのとおり実践していたというわけである。このとき、中央放送局の五味は、青年団に一つの宿題を出していた。「私達のデモクラシー」というテーマで考えてみてくれという意味である。「デモクラシーの標本とでも言うべきことを一寸お話しすれば、自分の行うことに責任を持つということであり、又責任を以て行っただけがめぐみがあるということ」という話をつけ加えていた。青年たちがこの宿題をどのようにレポートしたのかは不明であるが、「デモクラシー」というテーマが真剣に楽しく議論されたのではないか。

次に青年団の地域活動を見ておく（表V-25）。このように熊川青年団の活動は、まさに地についたものであり、一つ一つ成果をあげていく実績をつんだ。それは地域に密着した、ボランティア

活動」といってもいい。一方で「首にマフラーをまき、毎日をぶらぶらして卑俗な流行歌をうたい、声高く闇ブローカーの話をする青年」(「西多摩郡青年座談会(一)」『ふるさと』)がいる反面、地域がかかえている問題解決に積極的にかかわっている青年の姿をみることができる。

昭和一五年に福生・熊川両村が合併して福生町となっていたが、なぜか青年団は、前述のように二つの団が別々に行動していた。戦後、「いままでのような形では、今後の発展に支障があるということで、両団の幹部がたびたび交流して、その気運が盛りあがってきた」(森田正の発言「座談会・福生町青年団」『ふっさっ子・二』)ところで、同二年九月一日と二三日に準備会を開き、一〇月のはじめに両団合併が成立したのである。合併を機会に、『理想』という色刷りの機関誌が発行されるようになる。ほぼ同じ頃、西多摩郡連合青年団(郡団)発足へ向けての動きがあり、福生青年団の橋本孝蔵らが中心となってまとめ九月八日に青梅の初音座で結成式をおこなっている。町村の単位の青年団が、郡単位での横のつながりや交流ができるようになったのである。そのことはまた、それぞれの青年団活動の活性化に役立ったのである。

第三節 『あかざ』にみる文学と青年の苦悩

「あかざ社」誕生と

地域社会の民主化

青年団活動と並んで、福生地域では新しい文化運動の芽が次々と発芽し、開花していった。そのうちの代表的な活動に「あかざ社」がある。発足は「昭和二年(一九四六)夏頃」(刈込穂「福生における戦後の文化活動について」『ふっさっ子・二』)といわれているので、かなり早い。十数名が初発メ

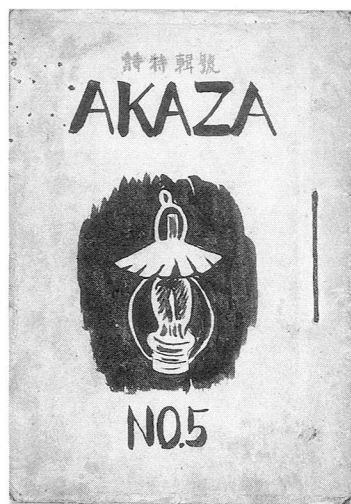


図 V-106 『あかざ』第5号

ンバーである。しかし、自分たちの作品や意見発表の場として機関誌『あかざ』を発行し、定期的にお互いが批評しあうような例会が設けられるようになったのは、翌二二年二月以降のことと推測される。それまでの半年間くらいは、「文学、演劇、音楽、講演、その他あらゆる面にわたり、この町の文化向上のために活動を幅広く展開して行こう」（前同）と、話し合いを継続してきた。その中から次第に「あかざ」の芽が生まれてきたといえる。「どこでも生える雑草ではあるが、その生育と強靱性こそ、敗戦の中からたちあがる我々庶民の姿」（前同）と重なっていると判断し、正式名称が決まった。それはまさに昭和二年から二二、三年にかけて全国各地に芽生えた「草の根の文化運動」の一つであった。

この会の「規約」と「申し合わせ事項」を見てみよう。

申し合わせ事項

（昭二二・一一・一五）

一 当分の間、定期会合は次の通りとします

イ 第二土曜午后七時から系統的な文学研究会

ロ 第四日曜午后一時から作品批評会（福生中学で）

一 作品の提出は第四日曜とし、批評会のあとで編輯（集）会

議をやる

一 中央との連絡でいけいを促進し、新日本文学会友の会の設立をはかる

規約

一 この会は、あかざ社と言ひ、事務所を福生町駅前橋本孝蔵方におきます

二 この会は、文学の創作、研究を行い、併せて郷土の民主化を促進しようとするものです

三 会員は毎月二回、定期会合を持ちます

四 会員は毎月拾円の会費を納めます

五 事務を処理するために、庶務係と会計係をおきます

六 この会は次の事を行います

イ 機関誌の発行（毎月一回）

ロ 作品批評会及研究会（毎月各一回）

ハ 講習会、座談会、及作品発表朗読会

ニ 書籍の購入、回覧

ホ 他文学との連絡でいい

ヘ その他

（橋本孝蔵家文書）

会の性格は「系統的な文学研究会」（第二土曜の午後七時より）とあるように、主に文学好きな仲間が集まった会である。会員相互の「作品批評会」（第四日曜日の午後一時より）を月二回、定期的に開催する。親団体のようなかたちで新日本文学会とは連携をとることがうたわれている。規約にもあるように「文学の創作、研究を行い、併せて

郷土の民主化を促進」することが目指された。単なる創作活動だけでなく、地域社会の「民主化」をもうひとつの柱としたところに、「あかざ」グループの特徴が表われている。

文化を社会生活の中心として、精神的、物質的の両面にわたって、その全体の発達進歩を企図してゆく、それが文化主義であり、敗戦の混沌とした中に誕生を見たのが、文学を課題として、如上の目的を戦禍のすさんだ中から不死鳥のごとくよみがえらせるべく、有志で結んだ

会員の刈込の文であるが(刈込「福生における戦後の文化運動について」『ふっさ子・二』)、混沌とした戦後の社会の中に、「文化」というものを中心にして物心両面の発達をはかっていこうとした『文化主義』は、新鮮な響きをもって仲間たちに伝わっていったのではないだろうか。それはまた、「あかざ」の母体ともなる新日本文学会の次の言葉(『新日本文学』創刊のことば、昭和二十二年三月)と通底している。

日本の文学は、日本をこんな状況に陥れた封建的なもの軍国主義的なものに患はされて正しい発展を阻まれて来た。今、それらのいやなものが片はしから払ひおとされつつある。われわれ人民の上にのしかかっていた、かさぶたのように気持のわるい、そして時には命とりの病氣のように恐ろしかった害悪から大部分は自由になって、われわれ日本文学は背伸びをし、重苦しく屈げていた閥節を伸ばして、旅立とうとしている。

軍国主義という怪鳥に前進を阻止され、「かさぶた」や「命とりの病氣」に侵されていた状況から脱出し、自由になった今こそ新しい旅立ちを、といっているのである。「あかざ社」の目指す方向も、「背伸び」をし、「閥節を伸ばして」創作と民主化の運動を実践することが意識されていた。戦後の民主主義文学運動の原点ともいえ「新日本文学会」とこのようなところでつながっていることの意味は大きい。それは会員の館田真一の力によるところ大であった。

また、蔵原惟人、中野重治、宮本百合子、徳永直、窪川鶴次郎、壺井繁治、江口渙、藤森成吉等、プロレタリア文学を歩むこうした人々と気脈を通じあうものがあったからである。新日本文学会は全国各地に呼びかけて支部や「友の会」をつくっていくが、そうした組織のひとつに、「あかざ」グループは位置していた可能性もある。

なぜなら、会の活動の中での読書会に、新日本文学会の中心的人物の岩上順一の『文学の眺望』がとりあげられ、会誌『あかざ』の巻頭言に同会の宮本百合子の「女性の歴史——文学について」からの引用文が掲載されていたりしているところからも推測されるのである。

あかざ会員の三つのグループ あかざ社には、とくに会長や会の代表というものはおかれていない。ピラミッド型の組織でなく、全員が平等に会にかかわり、責任を持ちあう組織だった。庶務係で実質的な編集長が山崎愛治で、

事務所は橋本孝蔵宅におかれ、会計係も兼務していた。会員は会誌『あかざ』から読みとっていくと、延べ二九名が確認されている（新井勝紘「文学グループ「あかざ」の活動」——焦土の中の地域文化運動（その5）、『隣人・九』）。表V-26をみていただきたい。「あかざ」の活動期間の中での出入りはあるので、常時活動は十数名と推測される。表V-26は、入会順で、林から和田までの二二名が発足時のメンバーである。二九名を分類してみると、第一・第二国民学校の「教員グループ」、館田、佐藤、刈込らのように、疎開者や戦後になって仕事を求めて移り住むようになった「移住グループ」、福生生まれで福生育ちの「在地グループ」の三グループで構成されていたことがわかる。この三つの輪が重なることによって、より大きな創造力が生まれたといえるだろう。こうした地域の文化運動が結実する背景には、単一のグループだけの活動の枠を大きくつき破るエネルギーが必要である。その意味で三つの輪はどれ一つ欠くことができなかったのではないだろうか。

第3節 『あかざ』にみる文学と青年の苦悩

表 V-26 『あ か ざ』会 員 名 簿

	氏 名	経 歴	住 所・所 属
1	林 八十九		福生第一国民学校
2	山崎 愛 治	福生中学・国語の教師、大正6年生。 静岡県出身、都内から疎開のかたちで福生へ。昭和26年に国立へ移る。	福生第一国民学校
3	浜 中 伴 蔵 (岩下)	復員して第一国民学校教員に復職 「ふっさ」という会誌を発行 並木のあとの「ふるさと」を編集	福生第一国民学校
4	並 木 嶋 雄	第二国民学校教頭・ふるさと会を結成し、 「ふるさと」という名の会誌発行	福生第二国民学校
5	関 口 俊 茂	第二国民学校教員	福生第二国民学校
6	菊 池 正 大	東秋留国民学校教員	東秋留国民学校
7	今井誉次郎	西多摩国民学校教員・明治39年生 岐阜県出身・小砂丘忠義の生活綴方運動に 傾倒・昭和21年に西多摩小に赴任し、生 活綴方運動を实践、「社会科西多摩案」作 成・西多摩民主主義研究会発足、西多摩自 由懇話会や西多摩夏期大学の中心的指導 者	西多摩国民学校 (羽村)
8	館 田 真 一	疎開者として福生へ、時計修理工。戦後時 計の業界誌をやる。戦前は非合法活動	福生町福生 1058
9	佐藤文之助	館田真一宅に下宿していた。青森県出身。 「青年新聞」の記者。昭和22年末、青森へ 移る。	福生町福生 1058
10	橋 本 孝 蔵	戦前から福生青年団長、戦後も福生と熊川 合同の福生町青年団の団長をつとめる、西 多摩自由懇話会や西多摩夏期大学にも参 加・福生町役場勤務	福生町福生 767
11	刈 込 正 雄 (一穂)	戦中は落下傘部隊に所属・復員軍人 詩人・夫人が福生の人	福生町福生
12	和田弥一郎	立川にも在住していた国鉄職員。	福生町・原茂方
13	小 作 孝 一		西多摩村(羽村)
14	佐 藤 三 郎	『あかざ』7号から名前掲載	
15	山崎 茂 男	そろばん会主宰・道芝会会員	福生町
16	笹 本 裕 子		福生町永田
17	村尾千代子		福生町
18	笹 本 玲 子	永田の古奈屋旅館の娘・ピアノと合唱	福生町

	氏 名	経 歴	住 所・所 属
19	宮田義勝	10号から参加	福生町 福生町 熊川 福生町
20	森田 実	表紙・扉絵担当, 裁判所書記, 青森県出身, 母が保育園, 「美術研究会」発足 演劇「新しい力」の舞台の背景画担当	
21	伊豆山晴子	夫が青年団員・母が保母	
22	細谷利男	福生青年団員・農業・読書グループの「道芝会」主宰。『多摩の礎』発行	
23	澁谷節子	15号から登場	
24	町田(不明)	15号から登場	
25	村野久子	18号から登場	熊川
26	興石 泉	ソ連抑留・復員軍人・塗装屋から泉塗装工業・妻が福生の人・のち渋谷で会社経営・再度福生に戻る, 演劇で演出担当	
27	井草春子	『あかざ』14・19号に執筆	
28	和田照子	『あかざ』15号に執筆	
29	館田祥子	『あかざ』18号に執筆	

- 1 名前の順序は, 号の若いほうから回覧順序に登場してきた順。不明の号があり会員全員を網羅しているわけではない
- 2 27・28・29の女性三名は, 『あかざ』の回覧順序に掲載はないが, 『あかざ』に執筆しているので会員とみなした。和田弥一郎・館田真一の夫人か
- 3 「神戸孝三」は橋本孝蔵のことと推測した
- 4 宇佐美静治からの聞き取り(1992・11・29)で補充
- 5 山崎愛治・佐藤文之助からの聞き取りで補充
- 6 新井勝紘「文学グループ「あかざ」の活動」(『隣人・9』)の表をもとに修正・補充した

一年半つづいた会誌 機関誌『あかざ』の発行 ざは昭和二年(一九一七)二月に第一号を発行して以来、翌二三年二月までの一三号までは月一回発行されていた。三月に一度ブランクがあったあと一四一七号までは定期発行がつづき、一七号のあと三か月の空白があつて一八・一九号(同二三年一月)とつづく。この一九号が最終号とみなされるので、会誌発行は一年半ばかりつづいたことになる。この短期間の中に二九人ほどの会員の創作活動は凝縮している。

会誌はガリ版刷りではなく、会員の持ち寄り原稿を綴り、それに表紙、目次、編集後記などを付して会誌形態にし、それを会員の家に順番に回覧する

第3節 『あかぎ』にみる文学と青年の苦悩

回覧順序		
1.	館田真一 (雑誌『あかぎ』)	6月24日→26日
2.	佐藤文之助 (会)	26日→28日
3.	橋本雪蔵 (会)	28日→30日
4.	和田野一 (会)	7月1日→3日
5.	刈込正雄 (会)	3日→5日
6.	並木橋雄 (雑誌『あかぎ』)	5日→7日
7.	佐中作蔵 (雑誌『あかぎ』)	7日→9日
8.	山崎愛治 (雑誌『あかぎ』)	9日→11日
9.	今井繁太郎 (雑誌『あかぎ』)	11日→13日
10.	小川孝一 (雑誌『あかぎ』)	13日→15日
11.	菊地ひさ (雑誌『あかぎ』)	15日→17日
(雑誌『あかぎ』……17日、本誌『あかぎ』に掲載された。同会が『あかぎ』の発行所をもちきりた。		
次回回覧会不記。		
7月5日(会)永田7月12日、『あかぎ』会		
。17日(会)永田7月12日、『あかぎ』会		

図 V-107 回覧順序

方法であった。つまりオリジナルな肉筆冊子が一冊作成されたのである。

『あかぎ』の内容は、現存する号を通してみると、詩が圧倒的に多い。次に短編小説のような創作、随筆、意見などがあり、最後に前号の作品の読後感や合評会記録、会員通信などがついている。執筆者では毎号必ず作品を載せているのが山崎愛治で、回数も飛び抜けて多い。次に館田、刈込、橋本、並木、佐藤とつづく。実質的にも山崎がこの会をひっぱっていたことがわかる。例会の場所も山崎が所属した学校や山崎の自宅がもっぱら使われていた。

館田もまた毎号のように作品を発表していたが、館田は「文学は政治とつながる。あらゆるものとつながる」(「TEA・ROOM」『あかぎ』一五)といって、政治と文学の問題を鋭く会員に投げかけていた。つまり、現実から目をそらした文学を批判し、自己自身を厳しく見つめるところからでくる「パッション」を、自分の言葉で表現することを強く主張していた。「文学を投げることは自己を棄てることに外ならない。いはゞ生きることを放棄するであ

ろう。あなたまかせで生きてきたものの哀しさが戦争をおこした。そしてそれが間違っていたことを八・一五で知らされた筈だ。今更ら何んのためらいが必要であろう」(前同「TEA・ROOM」と館田の主張は厳しい。現実には躊躇し、たじろいでいる仲間たちに、毅然とした態度でのぞむことを要求している。

そして、「あなたと同じ思いの人々と丸い輪をつくって、どうしたらその胸を明るい明日の希望につないでゆくことが出来るかを話し合おう」(『あかぎ』一九)と、力の弱いものの連帯を呼びかけ

ているのである。

戦争と文学 『あかざ』の作品の中では刈込が、自分の戦争体験をひきずりながら、格闘していた。落下傘部隊に
の原点 所属した復員軍人である刈込の苦悩は人一倍のものがあつた。次の様な文(『あかざ・一九』)を読む

とき、一人の人間が戦争とどれだけ深い関係を結んでしまったのかを読みとることができるのである。

かつての戦争の日、私はこの戦争が日本にとって敗戦であつて呉ればよいと祈り願つた事は一度でもなかつた。だからその事が現実となつて我々の目前に現れた時、真実日本人としての私の胸中にははげしい混乱が起つた。その混乱の中から新しい世界視界がはのぼると、しかして遅々ときざしはじめたのを私は知つて居る。私のこころの巨巖が断頭台にだけ散る日が近づきつつある。取り残された私の岩石のくだけ散る日は何時であらうか。真実そのことを真剣に考えるが故に、いたづらに観念だけの空車を空滑りさせては不可ない。その様なことを此の頃泌々と考えてます

負けることなど一度だつて考えたことのない若者に、敗戦の現実の極度の「混乱」を招いたのである。その混乱の中からどう一筋の光明を見つけたでいくのか。「私のこころの巨巖が断頭台にだけ散る日」こそ、夜明けとなるわけであるが、「私と言うものの胸の中に取り残されている岩石の数々が、折にふれ、時にふれ、ゴロゴロと今でもころがりあうのを、自分は何度も知つて居る。この岩石を取り除く為のかぎりない努力、そこに文学がある。私の文学が」(刈込「福生における戦後の文化活動について」)という刈込の苦しみは、自分の心に残りつづけている戦争の残滓ざんしとの真剣勝負となつて、『あかざ』文学の原点になつて居る。それは橋本にも、佐藤にも、「あかざ」会員全員に通底する文学への原点でもあつた。

「あかざ」の 創刊以来順調につづけてきた「あかざ」の活動も、一年後の昭和二三年暮頃にはひとつの壁にぶち
停滞と終焉 あたっていた。「われわれはここをのり越えないと単なる文学青年の集まりに墮すると思うのです。

脱皮を要求されている時なのです」(『あかざ・一九』)と、会員自らが分析していた。会員の橋本は、生活と文学を
どうきり結んでいくことができるのかを問うていた。山崎愛治はそれを「人間的立場」という言葉で表現し、そこに
こそ文学の原点があると主張していた(『あかざ・一八』)。「人間のふるさとを衝くもの」でなければ文学といえない
ともいっている。そのためには「生きる」ことの厳しさが求められるのである。

『あかざ』が二年もたずに終刊に追い込まれていったのはなぜなのか。個々の会員の生き方に緊張感が薄れてし
まったのか。生活と全面的に向きあう力が失ってしまったのか。「生きる事」と「散文を書く事」、つまり「文学」と
の間に隙間が生じ、ペンを持たない安易な道に逃避してしまうようになぜなってしまったのか。

戦後の地域文化運動のいきつく先を暗示するような、「あかざ」の幕切れであった。はたしてそこにまったく政治
的イデオロギーのおいをかぎとることがなかったかどうか、その点はまだ検証できていない。ただこの短期間の文
学活動が、福生の地域に何も残さないで終わったということはけっしてない。有形無形の影響を与えたことは間違
ないであろう。

第四節 「学ぶ場」の自主開設と地域文化の開花

西多摩自由懇 「あかざ」グループの誕生から一年後の昭和二年（一九四七）六月、西多摩郡自由懇話会設立準備会話会の設立 が福生で開かれた。その設立趣意書（橋本孝藏家文書）は次のとおりである。

われわれの周囲には、われわれの手で解決せねばならない事柄が山積みしています。地方自治・地方文化・この大道を切り拓いてゆくものは他の誰でもありません。われわれ自身なのです。

然し一人一人は皆、燃えたぎる心を持ち乍ら^{なが}今尚^{なほ}それが一つの大きな力になって動いてはいません。不満を己れの心に押し込めていては、折角燃えあがった民主日本への熱情は何時とはなしにさめてしまいます。このまゝ再び古い殻の中に閉じこもってしまつてはどうなるのでせうか。

われわれは焦慮の念やむなく、懇話会を創る決心をしました。西多摩に住むあらゆる層、あらゆる年齢を問わず、この多摩の地を美しい住みよいところにしたい為に、どんな僅かな力^{わずか}でも出し合つてゆこうとする人々によつて、西多摩自由懇話会はつくられるのです。そして自由に意見を述べ合い、相談し、仕事をきめて一つ一つ実業してゆきたいのです。

自治、住みよくするにはどうしたらよいか。

文化、自治を押しすゝめてゆく美しい心。

われわれは先づ第一にこの夏、七月十三日から八月三十一日までの毎日曜、西多摩夏期大学の開講を準備して

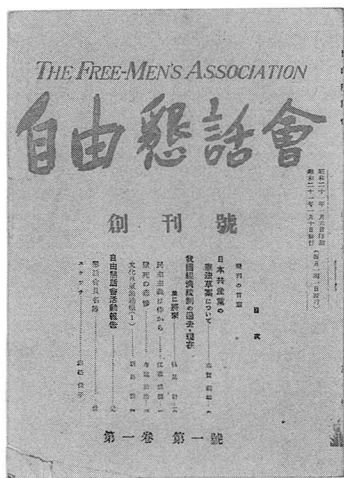


図 V-108 『自由懇話会』創刊号

います。

文字通り、生活と文化と、混然一体となった郷土をつくりたいのです。

これ以外に日本再建への道は見つけ難いと信じているわれわれの微意をお汲みとりの上、懇話会々員になって下さるよう、お願い致します。

昭和二十二年六月 日

西多摩自由懇話会設立準備会

地方自治の確立、地方文化の創造のための連帯をという呼びかけである。年齢や男女の差別もなく、自由な立場ではつきりものがいえるような組織にすることもまた主張されている。すでに「自由懇話会」の影響をうけて八王子市の元八王子を中心に「多摩自由懇話会」が発足（同二年一月）していたが、「西多摩自由懇話会」もおそらくこの影響下に誕生したことは確実であろう。「自由懇話会」の基本的視座は、「人権の尊重、民主主義の徹底、および大衆の生活安定なくしては、如何に科学が振興せられ、芸術が尊重せられても、その国は文化国家と呼ばれるに価しない。それ故に、われわれの文化運動は、労働者、農民および広汎なる人民層の政治闘争および経済闘争と固く提携して行かなければならない」という立場にあった。そして、一農村文化の高揚 二知識階級と大衆との知識的文化的隔たりの解消 三男女の知的水準の隔たりの解消の

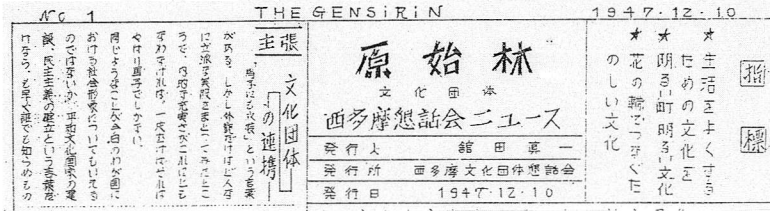


図 V-109 「原始林」第1号（昭和22年12月10日）

一六日までの全一五回に及ぶ講座開講である。第一期の聴講申込者は三郡二市（八王子・立川）、東京市・埼玉・千葉・神奈川などから四六一名の応募があった。開講日当日には三〇〇名を越える聴講生が集まって「人民のための人民による人民大学」は大いに盛りあがった。この聴講生の中に西多摩郡からは六名参

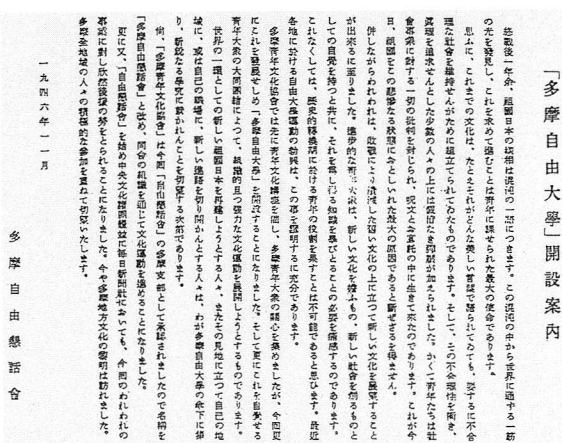


図 V-110 「多摩自由大学」開設案内（昭和21年11月）

三つの目標をにかけて、全国の同志にアピールを送っていた。この呼びかけをうけて、「多摩青年文化協会」は「多摩自由懇話会」に名称変更したのであるが、「西多摩自由懇話会」もこのアピールを受けとって、いたのではないかと思われる。全国的組織「自由懇話会」→「多摩自由懇話会」→「西多摩自由懇話会」という流れの中で、運動の展開状況もみる必要がある。知識や文化の面での懸隔をうめようと「多摩自由懇話会」として最初に企画したのが、「多摩自由大学」である。第一期は昭和二十一年一月二四日から翌二十二年三月

表 V-27 西多摩夏期大学カリキュラム一覧

	開講年月日	講 師 名	講 座 内 容
1	22・7・13	新 島 繁	青年と文化
		鈴木信太郎	絵 画
2	7・20	滝崎安之助	国際情勢
		中村良治	国際情勢
3	7・27	鈴木東民	ジャーナリズム
		佐藤昇	アメリカ事情
4	8・3	中西悟堂	小 鳥
		徳永直	文 学
5	8・10	角圭子	恋愛論
		関鑑子	音 楽
6	8・17	鮎沢新太郎	郷土史
		上滝功	農業問題
		平井清	婦人問題
		川崎大治	農村文化
7	8・24	中村哲二	憲 法
		薄田研二	演 劇
8	8・31	西井晋	世界史
		高橋磯一	日本史

- この一覧は、西多摩懇話会ニュース『原始林』（発行人・館田真一、発行所・西多摩文化団体懇話会、昭和22年12月10日発行）の記事から作成した
- 当初予定していた講座で開設できなかったのは以下の通りである
 - ①宮本百合子（新しき文化のために）
 - ②平野義太郎（国際情勢と今後の日本）
 - ③服部之総（近代日本史）
 - ④ぬやまひろし（家族制度と新しい倫理）
 - ⑤深谷進（日本農業の将来）
 - ⑥羽仁五郎（文化国家の構想）

である。

ユラムは表V-27のよう

「日常生活に深く根をおろした智識の獲得」につとめることが肝腎と説いている。現実の社会や生活の視点に立ってこそ、地域文化の創造が可能になるという考え方が、基

加していたが、そのときに強いインパクトを受けた者が、「西多摩自由懇話会」に結実し、「多摩自由大学」のミニ版を福生でおこすことになる。

西多摩夏期大学の開設 「多摩自由大学」開校から半年後の昭和二十二年七月、福生小学校（福生一小）講堂で「西多摩夏期大学」が開設された。呼びかけのチラシ（橋本孝蔵家文書）には「今まで文化とか教養とか云はれてき

たことがらは、私たちの生活の理解には何ほどの役にも立ってゐなかつたのです。それは根無し草のようなたよりないものであったのです」とあり、従来の上べだけの文化と教養ではなく、もっと生活に密着した文化をつくるために

第一回西多摩夏期大學		No. 13	
聴講券		年令	氏名
主催 西多摩夏期大學			
7・13 新しき文化のために			宮本 百太郎
7・20 美 術 国際情勢と今後の日本			鈴木 信太郎
7・27 音楽 近代日本史			関 鐵之助
8・3 文 學 家族制度と新しい倫理			服部 徳直
8・10 小島と共に 貿易再開と日本經濟			徳永 与一
8・17 郷土史 日本農業の将来			西 金助
8・24 (座談會) 生活と新憲法			中 大造
8・31 演 劇 文化國家の構想			中 村 哲二
(座談會)			藤 田 研五

表 裏
図 V-111 西多摩夏期大學聴講券

まず充実した講師陣におどろく。当初予定していた講座で開設できなかったものも多いが、絵画、文学、音楽、歴史、演劇、文化、ジャーナリズム、自然、国際情勢、憲法、農業、婦人など、じつに幅広い分野におよんでいる。ということは、これだけの講師を呼べる下地が西多摩にもあったということであろう。実際に開設した講座で比較すれば、「多摩自由大学」(第一期)と同じ講師はわずかに一人(新島繁のみ)しかいなかった。それだけに西多摩の独自性は強いものがあったといえる。

「教室は溢れるばかりの聴講生で満された」(刈込一穂「福生における戦後の文化活動について」『ふっさっ子・二』)という。ちなみに初日の七月一日には一五〇名もの参加があり、岸町長も参加者の一人であった。全期八回をとおしての聴講生は三三〇名、一日だけの会員を加えると、なんと延べ三〇〇〇人にもおよんだという報告もある。毎回七〇人から一〇〇人くらいが参加していたともいわれている。最近のカルチャーセンターを上まわる参加者数である。戦時期の長い間、「自由に学ぶ」ということに飢えていた、その反動とでもいえるような活況を呈していた。それぞれの講座内容については明らかにになっていないが、迫力あるものであったにちがいない。教える側も、なんの束縛もない「自由教室」は久しぶりであり、それだけ熱がはいったことが推測される。さらにそれは相互に学びあう新しい「民衆大学」像を実践したものであった。

南多摩を中心とした「多摩自由大学」、西多摩、とくに福生を中核として開設された「西多摩夏期大学」は前述の

とおりであるが、民衆が学ぶ場は三多摩各地に生まれていた。たとえば武蔵野町（武蔵野市）では「社会大学ゼミナール」（昭和二十二年五月）、立川での「夏期大学」（北多摩連合青年団主催、同年八月）、西多摩郡五日市町の「五日市夏期大学」（同年八月）、同郡西多摩村（羽村市）の「西多摩社会学校」（同年九月）、立川を会場（推定）とした「北多摩自由大学」（同年十一月）という具合である。

元八王子や福生だけが抜きん出ていたわけではない。それはまた学びたいという欲求の実現の場として、次々に開設され、三多摩の民衆の期待に大いにこたえていた。

これら一連の学習機会の増大は、三多摩の近現代史の歩みと不可分ではなく、底流にある文化創造の伝統が、かたちをかえて噴出してきたとみることができる。その意味で、福生は戦後文化運動の中核を占めていたといえよう。

地域文化の開花と そろばん会の志

多摩自由懇話会は「多摩自由大学」のほかに青年部、教育部、政経部、新生活部、芸術部、農業部、事業部、図書部、編輯部など多分野の活動も展開していた。芸術部は「農村演劇実験教室」を、青年部は「巡回講演」を、農業部は「農機具研究会」を、新生活部は「パン焼研究会」を、教育部は「くいのあゆみ」公開検討研究会」というように、さまざまな活動がおこなわれた。一方、「西多摩夏期大学」もまた、同郡の文化運動を簇生^{ぞくせい}させ、飛躍させる起爆剤としての役割を充分はたした。福生では読書会ともいえる「道芝会」（細谷利男が中心）、青年の演劇公演では昭和二十一年「青空市場」（橋本孝蔵作）、同二十二年「人生の裏面」、「鯉名^{こいな}の銀平」（生子国利作）、同二十三年「河童^{かっぱ}」（遠藤頼雄演出、柚木誠一がごん助役で青年団演劇祭の演技賞受賞）、同二十四年「猿^{ましか}」（遠藤頼雄作、郡団総合文化祭の演劇コンクールで優勝）、同二十五年「次郎案山子^{かかし}」（榊原政常作、篠崎久治演出）、絵画グループ「みどり画会」、コーラス会、美術研究会、民主青年同盟などが続々と誕生し、活動をはじめた。



図 V-112 「そろばん塾月報」第1号

のである。

なかでも山崎茂男の活躍は見逃すことはできない。道芝会の会員だった山崎は、戦後の福生が「都会の灰燼から逃れて来た疎開者の急増、ガムと靴下と石鹼を代償に、貞操を売り物にする女性が急増し、駅の南口には、いわゆる赤線区域と区別されたいかがわしいバラックが急増して行った」(刈込一穂、『ふっさっ子・二』) 現実に関心を痛めていた。なぜならこうした環境の中で「子どもたちの生活の荒廃ぶり、自らも含めた若者の無気力」(山崎茂男「福生珠算学校三十年」)の姿に痛切な思いを抱いたからであった。青年教師・山崎にとってどうしても看過できない現象であった。けばけばしさ、いかがわしさの中での若者の心の荒廃に黙っていられな

なったのである。

昭和二二年三月、「福生そろばん会」をスタートさせる。それは単に「そろばんに向う指先一本の器用さ」という単純な勉強でなく、その社会に有能な人間になるための一里塚として、山崎は「そろばん会」を考えていた。そろばんの修業を通しての教育がはじまったのである。山崎はさらに「そろばん会は単なるそろばん会ではなく、極めて小ではあります、文化史的なものとして(そー、私共無能階級の強力な結集団体で、私共の創意の文化会であるべきだ)ゆきたい」(「そろばん会会報一」と決意を語っている。「そろばん会」そのものを一つの文化史的なものとしてゆくことを目指していた。山崎には、そろばんⅡ文化という考えがあった。そろばん会を拠点に福生という地域に文

化運動を展開し、定着させていきたいという思いでいっぱいであった。だからこそ、そろばんの学習のほかに、討論会、茶話会、作文回覧、見学会、鑑賞会と開催したのである。一人の若者の発想ではあったが、ともかく一粒の種を播いたのである。それにこたえるように、そろばん会第一期生は「新しい日本の国民の一人として、数多くの努力をしなければならないと思う時（略）、どうかこの算盤会が良い『集い』になります様、そして私達の生活に少しでもうるおいを与えられる様な、文化会と云う様な会に迄延びて行きます様」（『そろばん会感想文綴』）と綴っている。まさに師弟の思いは一致したのである。

ともかく山崎の初発の思いは、情熱をもって実践されてゆき、ひとつの路線が敷かれた。それは「そろばん塾月報」（昭和二四年三月）からはじまり、「珠算学校月報」（同二九年六月、五九号）、「福生珠算学校月報」（同三〇年七月、七二号）、「月刊ふっさ子」（同四七年一月、二七〇号）とつづき、それが五〇〇号になり、平成六年現在でもなお発行がつづいている、一連の月報の歩んできた軌跡（おだち）に深く刻印されているのである。月報（月刊ふっさ子）は単に会員や生徒、および父母との連絡紙という性格をはるかに越え、地域の人と共生し、ともに歩んでいくという姿勢が徹底的に貫ぬかれたために、貴重な戦後史となっている。

小さな私塾から出発した「そろばん会」も、福生という地域にしっかりと根をおろし、そこから育っていった多数の「ふっさ子」に有形無形の影響を与えつづけていることを考えると、その結実したものはいかに大きなものといえる。一九九一年三月の五〇〇号までの歴史については、『福生っ子の年輪』（「ふっさ子」五〇〇号記念のつどい実行委員会発行）を参照されたい。